第５課　聖書のみ

【暗唱聖句】

「というのは、神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができるからです」ヘブライ4：12

【日曜日・支配的基準としての聖書】

ＳＤＡは、聖書だけがわたしたちの信仰と行為の唯一の基準であると信じています。聖書の究極の権威を置いています。わたしたちの経験も理性も伝統といった諸要素も、聖書に従属しています。このような考えを「ソーラ・スクリプトゥーラと言い、聖書を解釈する基準が聖書以外からくる可能性を排除しています。このような考えは聖書から来ています。第一コリント4：6には「…あなたがたがわたしたちの例から、「書かれているもの以上に出ない」ことを学ぶためであり…」と書かれてある通りです。ただ、これは他の資料を参考にしてはいけないという意味ではありません。それらがさらに聖書に書かれてある事柄に対して、深い洞察を与えてくれるものなら役に立つことでしょう。たとえば、聖書の辞書や注解書、証の文などは聖書の理解を深めてくれることでしょう。ただ、それでも聖書はあらゆる資料に優先します。また、信仰上の解釈において対立が生じた場合には、聖書に何と書かれてあるのかということから、正しい答えを見出していかなければなりません。

【月曜日・聖書の一貫性】

聖書は長い年月をかけて、大勢の人たちの手によって書かれましたが、矛盾することがなく一貫しています。この驚くべき一貫性が、神様の霊感に導かれて書かれた証拠ともいえるわけです。旧約聖書と新約聖書が違うことが書かれてあると主張する人たちがいますが、注意深く読んでいけば決してそのようなことはないことがわかります。旧約聖書に書かれてある教えを、新約聖書が補足することはあっても、否定することはありません。同じ神様が導いて書いているわけだし、神様の言葉は真理であって、真理は変わることがないのです。

【火曜日・聖書の明瞭さ】

聖書は曖昧な表現は使わず、十分に明瞭です。それは子供でも理解できるものです。イエス様は繰り返し、「聖書にこう書いてある」とか、「律法を読んだことがないのか」など、聖書を読めばどうすべきか答えが明瞭に書かれているではないかとおっしゃっています。牧師でなければ聖書は理解できないというものでもないのです。もちろん、難解な聖句がないということではありません。深い霊的な洞察が必要なこともありますが、基本的な教えは実に単純であり明快です。例えば「隣人を愛しなさい」という教えは単純です。しかし、「隣人とは誰のことか」「愛するとはどういうことか」「その人が罪を犯せば何度まで赦さなければならないのか」など、人間は神様の単純な教えを複雑にします。その多くの場合、聖書の教えを素直に受け入れられないというところから来ているのではないでしょうか。

【水曜日・聖書で聖書を解釈する】

聖書で聖書を解釈すると、昔からよく言われます。ある聖句を別の聖句が補ったり、ある聖句の答えが別の聖句の中にあったりという具合に、聖書の解釈は、注解書などよりも、聖書それ自身の中に見出すことができるということです。キーワードで検索していくと、点と点が線になり、意味がより一層明らかになることが少なくありません。たとえば、私たちはよく残りの民の特徴として、ヨハネの黙示録12章17節の「竜は女に対して激しく怒り、その子孫の残りの者たち、すなわち、神の掟を守り、イエスの証しを守りとおしている者たちと戦おうとして出て行った」を引用しますが、この残りの民の特徴の一つである「イエスの証を守り通している」とはどういう意味なのかと聖書から探っていくと、同じ黙示録の中で「神を礼拝せよ。イエスの証しは預言の霊なのだ」（黙示録19:10）という御言葉を見出してその意味を悟るわけです。この場合、キーワードはイエスの証でした。本来であれば、ギリシャ語やヘブライ語など原語から同じキーワード検索をするのが良いのですが、日本語でも様々な発見があるはずです。

　ただ、このような部分的に聖句を抜き出すだけだと、全体像が見えなくなってしまう危険があるので、常にその御言葉が書かれた背景なども考慮しながら、全体の立場からながめ、それから部分的な関係を考えてみることが大切です。

【木曜日・「ソーラ・スクリプトゥーラ」とエレン・Ｇ・ホワイト】

「そして、教えと証しの書についてはなおのこと、「このような言葉にまじないの力はない」と言うであろう」（イザヤ書8章 20節）は誤訳で、正しくは「教えと証しの書にこそ尋ねよ。この言葉にしたがって語らなければ、夜明は訪れない」です。これは「口寄せや霊媒に伺いを立てよ」（イザヤ8:19）と言っている者たちに対して語られた言葉で、「教えと証しの書」とは、旧約聖書のことを指しています。聖書のみと信じていながら、口寄せや霊媒士に頼るのはもとより、他のものであっても頼るべきではなく、聖書にのみ尋ね、聖書の中から答えを見出しなさいということです。

　ところで、わたしたちセブンスデーが気になるのは、エレン・Ｇ・ホワイトの書物です。彼女の書いた書物は、聖書と同じように、すべて霊感に導かれているのは確かです。しかし、だからといって聖書にとって代わるものではありません。エレン・Ｇ・ホワイトにとって、聖書はあらゆう思想と神学の基礎であり、中心でありました。そして、聖書こそ最高の権威であることを繰り返し述べています。自分の書いた書物のことを、「大きな光に導くための、小さな光」であると述べ、読む人たちの目を聖書に向けさせています。彼女は次にように言っています。

「あなたがたは聖書をわかっていない。もしあなた方が聖書の基準に達したい、クリスチャンとして完全の域に達したいという願いを持って神の言葉を研究したなら、証の書を必要としなかっただろう」